

High School Students Summit on
"WORLD **TSUNAMI** AWARENESS DAY"
2019 in HOKKAIDO

「世界津波の日」2019 高校生サミット in 北海道

2019 9/ **10**・**11**
Tue Wed



報告書

**"Passing memories on to the future,
preparations for tomorrow"**

- Irankarapte from the Northern Land.

Learning about the threat of natural hazards and how to respond to them -

Venue : Hokkaido Prefectural Sports Center **"HOKKAI Kitayell"**

1-1, Toyohira 5-jo 11-chome, Toyohira-ku, Sapporo

"記憶を未来へ、備えを明日へ"

～ 北の大地からイランカラッテ。自然災害の脅威と対応を学ぶ ～

会場 北海道立総合体育センター「**北海きたえーる**」

札幌市豊平区豊平5条11丁目1-1

目次

イランカラプテ宣言	1
開催概要	3
タイムテーブル	5
全体記念撮影（9月10日 開会式）	6
参加校一覧	7
主催者挨拶	11
「世界津波の日」提唱者挨拶	12
事前学習ツアー報告	13
スタディツアー報告 1 班	15
スタディツアー報告 2 班	17
主催者挨拶	19
共催者挨拶	20
内閣総理大臣挨拶（ビデオメッセージ）	21
全体記念撮影（9月11日 総会・閉会式）	22
分科会グループ	23
分科会ファシリテーター	26
分科会報告	27
フォトギャラリー	52
「世界津波の日 2019」国連イベント	101
事前学習ツアー	103
事前学習ツアー アンケート	107
高校生サミット 参加者アンケート	110



Irankarapte Declaration

Since 2016, the year after the United Nations (UN) General Assembly adopted the World Tsunami Awareness Day Resolution, a High School Students Summit has been held annually on World Tsunami Awareness Day. This year, students from 44 countries have gathered in Hokkaido, a place characterized by a richly blessed natural environment and distinct seasons. We have learned about earthquakes, tsunamis, volcanic eruptions, snowstorms, and other disasters resulting from nature's fury, and how to respond to them.

We could also strengthen the *kizuna*, or "bonds," between our different countries by touching each other's hearts through serious discussions about what we should and can do to save lives when natural disasters occur, and how we can work to build back better during recovery from disasters.

We have decided to pass on these outcomes to other students worldwide, irrespective of country or region, to raise awareness of the threat of natural hazards and to act to save lives when natural disasters occur.

○ We will continue to learn about past disasters and gain an understanding about the current status and causes of natural disasters, as well as preventive measures, and transmit this knowledge.

- We can prepare for future disasters by learning from past experiences, such as evacuation drills, which better educate and prepare younger generations .
- We can be better prepared than we are now by using updated knowledge, such as social media, workshops, games and education from professionals.

○ We will spread greater awareness of disasters and stay prepared and vigilant, ready to take action at any time to secure our safety, regardless of the type of disaster.

- We will create a world that can collaborate in the event of natural disasters.
- We will widen the network between people through technology to strive for mutually understanding. By these ways, we will raise sustainable awareness for disasters.

○ We will actively participate in, cooperate with, and contribute to safety activities in local communities and initiatives focused on building back better during recovery from disasters to ensure a safe and secure society together.

- We will make sure that students become actively involved in visiting disaster-affected places to learn about first-hand experiences from older generations that were affected.
- We will create local school programs to improve student-community relations.
- We will give information about natural disasters to all generations by using new and traditional media.

We hereby declare that we will protect our irreplaceable nature and prepare for natural disasters while appreciating the blessings of nature and deepening understanding of the threats sometimes caused by nature.

September 11, 2019

High School Students Summit on
"World Tsunami Awareness Day" 2019 in Hokkaido





イランカラプテ宣言

2015年に国連総会で「世界津波の日」が制定されたことを機に、翌2016年から毎年開催されてきた「世界津波の日」高校生サミット。本年、私たち44か国の高校生は、四季折々の表情をもつ自然に恵まれた北海道に集い、時に地震や津波、火山噴火、暴風雪などの災害をもたらす自然の脅威とその対応について学びました。

また、私たちは、自然災害から命を守り、より良い復興に向けて何ができるかなど、真剣な話し合いを通じて互いの心に触れあい、世界各国の「きずな」を深めました。

私たちは、こうした成果を国や地域を問わず世界各地の高校生に広め、自然災害への関心を一層高め、自然災害から命を守るために行動することを決意します。

○私たちは、過去の災害について知り、自然災害の現状や原因、防災などについて学び、それを広めていきます。

- ・私たちは、避難訓練を通じた教育や準備など、過去の経験から学び、将来の災害に備えます。
- ・私たちは、ソーシャルメディア、ワークショップ、ゲームや専門家からの助言など、最新の知識を活用し、災害に備えます。

○私たちは、災害への意識を高め、日頃から、災害の種類に応じ自ら安全を確保する行動ができるよう、備えます。

- ・私たちは、自然災害が起きた際に協力できる体制をつくります。
- ・私たちは、相互理解を深めるため、テクノロジーを駆使し、人々のネットワークを広めます。こうした取り組みにより、災害に対する意識を高めていきます。

○私たちは、安全で安心な社会の構築に貢献するため、地域社会の安全活動やより良い復興に向けた取り組みに進んで参加・協力します。

- ・私たちは、災害被害を先達から直に学ぶため、実際の被災地域を積極的に訪れるよう取り組みます。
- ・私たちは、学生と地域との絆を深めるため、地域と学校が協力しあえるプログラムをつくります。
- ・私たちは、新旧のメディアを用い、あらゆる世代に自然災害の情報を発信します。

私たちは、自然の恵みに感謝し、時に災害をもたらす自然の脅威について理解を深めながら、かけがえない自然を守り、自然災害に備えることを宣言します。

2019年9月11日

「世界津波の日」2019 高校生サミット in 北海道



開催概要

■ 名 称

「世界津波の日」2019高校生サミット in 北海道

■ 開催趣旨

11月5日の「世界津波の日」は、津波の脅威と対策について理解と関心を深めることを目的に、2015年12月の国連総会において、日本が提唱し、我が国をはじめ142か国が共同提案を行い、全会一致で採択されました。

翌2016年から、世界各国の高校生が津波の脅威と対策について学ぶ場として、「世界津波の日」高校生サミットが開催されており、2016年の高知県では「黒潮宣言」、2017年の沖縄県では「若き津波防災大使ノート」、そして、昨年(2018年)の和歌山県では「稲むらの火継承宣言」が採択されています。

日本最北の地、北海道に住む私たちは、四季折々で表情を変える豊かな恵みを受けながら暮らしていますが、時として地震や津波、火山噴火、暴風雪など自然の脅威にさらされてきました。昨年9月の北海道胆振東部地震では、大規模な斜面崩壊の発生や液状化による家屋の倒壊など甚大な被害が発生し、また、1993年7月の北海道南西沖地震では、地震発生後の津波や火災により社会・経済基盤にも壊滅的な被害を受け、それぞれ多くの尊い命が失われたところです。これらの災害からの復旧・復興に際しては、関係者により多大な努力が払われるとともに、各地から大きな支援が寄せられ、速やかに対策が講じられてきました。こうした過去の災害を踏まえ、今後、巨大地震の発生が想定される千島海溝沿いの北海道東部地域などでは、住民の安全・安心を確保するため、防災・減災に向けた様々な取り組みを進めています。

世界的に見ても、約23万人の犠牲者を出した2004年のインドネシア・スマトラ沖地震・津波のほか、2005年のパキスタン地震、2008年の中国四川大地震、ミャンマーのサイクロン・ナルギス、2010年のハイチ地震、そして2011年の東日本大震災など、いずれも数十万・数万人規模の犠牲者を出した大災害が発生し、世界の持続可能な開発を進める上で、災害被害の軽減は国際社会の重要な課題です。

私たちには、こうした世界共通の脅威である大規模自然災害に対し、災害の記憶を教訓として防災・減災対策に取り組むとともに、ひとたび災害が発生した際には、迅速な避難などにより命を守り、その後は速やかな復旧・復興、また、「より良い復興」に向けた行動をとることが求められており、そのためには世界各国の相互理解と連携が欠かせません。

本年は、ここ“北の大地”北海道において、地震や津波などの災害から国民の生命、身体、財産の保護、国民生活及び国民経済に及ぼす影響を最小化できる国土強靱化を担う将来のリーダーの育成と、世界各国の「きずな」を一層深めることを目的に、「世界津波の日」2019高校生サミット in 北海道を開催します。

■ 主 催

北海道、北海道教育委員会

■ 共 催

国連防災機関 (UNDRR) 駐日事務所

■ 後 援

国土強靱化推進本部、内閣府政策統括官(防災担当)、外務省、文部科学省、国土交通省、気象庁、経済協力開発機構(OECD)、東アジア・アセアン経済研究センター(ERIA)

■ 会 場

北海道立総合体育センター「北海きたえーる」
(札幌市豊平区豊平5条11丁目1-1)

■ 開催日

高校生サミット	2019年9月10日(火)～9月11日(水)	北海きたえーる
レセプション (主催：外務省)	2019年9月10日(火)	札幌パークホテル
記念植樹・記念碑除幕式	2019年9月11日(水)	知事公館内
事前学習ツアー (主催：世界津波の日高校生サミット実行委員会)	2019年8月6日(火)～8月8日(木)	奥尻町
スタディツアー (主催：公益財団法人日中友好会館・株式会社 JTB)	2019年9月7日(土)～9月9日(月)	1班：奥尻町・倶知安町・洞爺湖町・壮瞥町 2班：釧路市・浜中町・美瑛町

■ 参加者

区分		人数等	区分		人数等	合計
日本	高校生	180名	海外	高校生	214名	394名
	引率	69名		引率	43名	112名
	計	249名		計	257名	506名
	参加校数	68校		参加国数	43か国	44か国

※次の3校が台風の影響により、参加取りやめとなりました。

- ・福島県 磐城緑陰高等学校
- ・大阪府 関西学院千里国際高等部
- ・神奈川県 横浜サイエンスフロンティア高等学校

■ 議長・総司会

【議長】	北海道札幌国際情報高等学校	2学年	井戸 静星
	学校法人札幌日本大学学園札幌日本大学高等学校	1学年	桐越 航
【総司会】	北海道札幌南高等学校	2学年	プラート アルヴィン
	北海道登別明日中等教育学校	5回生	竹縄 日南

■ 全体テーマ

”記憶を未来へ、備えを明日へ”

～ 北の大地からイランカラテ。自然災害の脅威と対応を学ぶ ～

■ 分科会テーマ

① 知識を得る ～過去の教訓の伝承

災害に対して適切な意志決定や行動選択をするためには、過去の災害について知ることや、自然災害等の現状や原因、減災等について学習することが求められます。

② 意識を高める ～災害への備えと迅速な避難

災害の種類に応じて自ら安全を確保するための行動ができるようになるには、訓練などを通し、台風や地震など自然現象に伴う危険を理解・予測し、それに適した行動ができるようにするとともに、日常的な備えを行うことが求められます。

③ 復興に向け共に行動する ～社会貢献、被災当事者との支援者の視点

安全で安心な社会を共につくっていくためには、地域社会の安全活動やより良い復興に向けた取り組みに進んで参加・協力し、貢献することが求められます。

タイムテーブル

1日目

9月10日 (火)

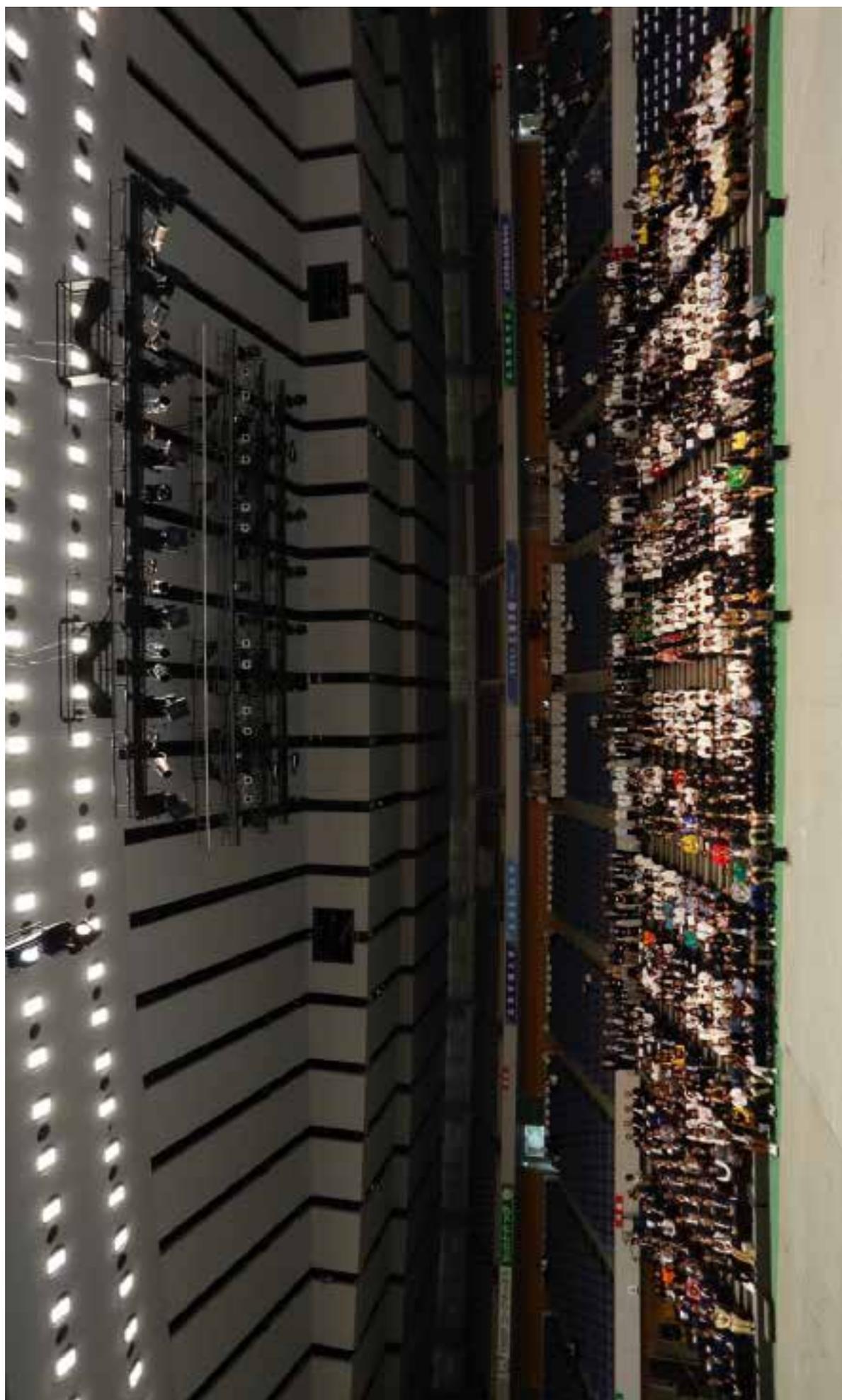
9:00-12:00	分科会 グループ内発表 グループ討論
	昼食
13:00-13:45	分科会 グループ討論
	休憩
14:00-14:45	開会式 オープニングアトラクション (北海道札幌白石高等学校) オープニング映像 参加国紹介 主催者挨拶 (鈴木直道 北海道知事) 提唱者挨拶 (福井照 衆議院議員) 事前学習ツアー報告・スタディツアー報告
14:50-15:10	記念撮影
	休憩
15:20-17:00	分科会 グループ討論 グループ統括

2日目

9月11日 (水)

8:15-8:45	記念植樹・記念碑除幕式 於 知事公館	
	移動	
9:30-9:50	記念撮影	
	休憩	9:50~11:00 大会宣言文調整
10:30-11:00	軽食	
11:15-13:20	総会・閉会式 主催者挨拶 (佐藤嘉大 北海道教育委員会教育長) 共催者挨拶 (カーシー・マディUNDRR官房長) ビデオメッセージ (安倍晋三 内閣総理大臣) 分科会報告 大会宣言発表 パフォーマンス (北海道札幌南高等学校) エンディングアトラクション	

全体記念撮影（9月10日開会式）



参加校一覧（国内）

※高校生議長を含みます。

番号	都道府県	学校名	生徒		引率	合計	
			男	女			
1	北海道	北海道浦河高等学校	3	0	3	1	4
2	北海道	北海道江差高等学校	3	0	3	1	4
3	北海道	北海道釧路明輝高等学校	3	1	2	1	4
4	北海道	北海道札幌国際情報高等学校	4	1	3	1	5
5	北海道	北海道札幌西高等学校	3	1	2	1	4
6	北海道	北海道札幌南高等学校	3	1	2	1	4
7	北海道	北海道滝川高等学校	3	1	2	1	4
8	北海道	北海道根室高等学校	3	0	3	1	4
9	北海道	北海道登別明日中等教育学校	3	2	1	1	4
10	北海道	北海道函館水産高等学校	3	2	1	1	4
11	北海道	市立札幌開成中等教育学校	3	2	1	1	4
12	北海道	北海道奥尻高等学校	3	1	2	1	4
13	北海道	北海道霧多布高等学校	3	1	2	1	4
14	北海道	北海道釧路北陽高等学校	3	0	3	1	4
15	北海道	学校法人札幌慈恵学園 札幌新陽高等学校	3	2	1	1	4
16	北海道	学校法人札幌日本大学学園 札幌日本大学高等学校	4	1	3	1	5
17	北海道	函館ラ・サール学園 函館ラ・サール高等学校	3	3	0	1	4
18	北海道	北海道札幌視覚支援学校	1	1	0	1	2
19	岩手県	岩手県立釜石高等学校	4	3	1	1	5
20	宮城県	宮城県気仙沼高等学校	3	0	3	1	4
21	宮城県	宮城県佐沼高等学校	1	0	1	1	2
22	宮城県	宮城県仙台第一高等学校	3	2	1	1	4
23	宮城県	宮城県仙台第三高等学校	2	1	1	1	3
24	宮城県	宮城県多賀城高等学校	3	1	2	1	4
25	福島県	磐城緑蔭高等学校 ※台風のため参加を取りやめ					
26	栃木県	栃木県立佐野高等学校	2	2	0	1	3
27	群馬県	高崎市立高崎経済大学附属高等学校	4	2	2	1	5
28	埼玉県	埼玉県立不動岡高等学校	2	0	2	1	3
29	埼玉県	学校法人早稲田大学 早稲田大学本庄高等学院	3	2	1	1	4
30	千葉県	千葉市立稲毛高等学校	3	2	1	1	4
31	東京都	東京学芸大学附属国際中等教育学校	3	1	2	1	4
32	東京都	東京都立白鷗高等学校	2	2	0	1	3
33	東京都	東京都立南多摩中等教育学校	3	0	3	1	4
34	東京都	学校法人富士見丘学園 富士見丘中学高等学校	2	0	2	1	3
35	神奈川県	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 ※台風のため参加を取りやめ					

番号	都道府県	学校名	生徒		引率	合計	
			男	女			
36	神奈川県	横須賀市立横須賀総合高等学校	3	3	0	1	4
37	神奈川県	学校法人聖マリア学園 聖光学院高等学校	3	3	0	1	4
38	福井県	福井県立鯖江高等学校	3	2	1	1	4
39	山梨県	北杜市立甲陵高等学校	2	0	2	1	3
40	静岡県	静岡県立池新田高等学校	2	0	2	1	3
41	静岡県	静岡県立駿河総合高等学校	3	1	2	1	4
42	静岡県	静岡県沼津西高等学校	1	1	0	1	2
43	静岡県	学校法人星美学園 静岡サレジオ高等学校	3	2	1	1	4
44	静岡県	学校法人静岡聖光学院 静岡聖光学院中学校・高等学校	3	3	0	1	4
45	愛知県	学校法人愛知真和学園 大成高等学校	2	0	2	1	3
46	三重県	三重県立桑名高等学校	3	3	0	1	4
47	三重県	三重県立四日市高等学校	1	1	0	1	2
48	京都府	学校法人立命館 立命館高等学校	3	0	3	1	4
49	大阪府	大阪教育大学附属高等学校平野校舎	2	2	0	1	3
50	大阪府	大阪府立高石高等学校	3	0	3	1	4
51	大阪府	学校法人関西学院 関西学院千里国際高等部 ※台風のため参加を取りやめ					
52	大阪府	学校法人創価学園 関西創価高等学校	3	1	2	1	4
53	兵庫県	兵庫県立尼崎小田高等学校	2	1	1	1	3
54	奈良県	奈良県立畝傍高等学校	2	1	1	1	3
55	和歌山県	和歌山県立串本古座高等学校	3	2	1	1	4
56	和歌山県	和歌山県立新宮高等学校	3	0	3	1	4
57	和歌山県	和歌山県立耐久高等学校	3	0	3	1	4
58	和歌山県	和歌山県立日高高等学校	2	0	2	1	3
59	岡山県	岡山県立井原高等学校	3	0	3	1	4
60	徳島県	徳島県立城南高等学校	2	0	2	1	3
61	徳島県	学校法人村崎学園 徳島文理高等学校	1	0	1	1	2
62	愛媛県	愛媛県立宇和島東高等学校	3	1	2	2	5
63	高知県	高知県立大方高等学校	3	2	1	1	4
64	高知県	高知県立高知南高等学校	2	0	2	1	3
65	高知県	高知県立宿毛高等学校	2	0	2	1	3
66	高知県	学校法人土佐塾学園 土佐塾高等学校	2	1	1	1	3
67	高知県	学校法人明德義塾 明德義塾高等学校	2	0	2	1	3
68	福岡県	福岡県立戸畑高等学校	1	0	1	1	2
69	福岡県	学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学校・高等学校	4	0	4	1	5
70	熊本県	熊本県立熊本高等学校	3	2	1	1	4
71	大分県	大分県立佐伯鶴城高等学校	3	1	2	1	4
			180	71	109	69	249

参加校一覧（海外）

番号	参加国	学校名	生徒		引率	合計	
			男	女			
1	アルゼンチン	Valle de Cholila Agrotechnical Educational Center	5	2	3	1	6
2	オーストラリア	Rose Bay High School	5	3	2	1	6
3	ブラジル	Olavo Hansen State School	5	4	1	1	6
4	カナダ	Port Hardy Secondary School	5	0	5	1	6
		North Island Secondary School					
5	チリ	Colegio Bajo Molle	5	2	3	1	6
6	中国	The High School Attached to Dalian University of Technology	5	2	3	1	6
7	クック諸島	Tereora College	5	2	3	1	6
		Nukutere College					
		Papaaroa Adventist School					
		Titikaveka College					
8	エルサルバドル	Colegio Internacional de San Salvador	5	3	2	1	6
9	フィジー	ADI MAOPA SECONDARY SCHOOL	5	3	2	1	6
10	フランス	Lycée PAUL SABATIER CARCASSONNE	5	5	0	1	6
11	ドイツ	Gymnasium Wilhelm-Raabe-Schule Hannover	5	2	3	1	6
12	インド	Z.P.H.SCHOOL TALAGADADEEVI	4	4	0	1	5
13	インドネシア	SMA Negeri 13 Banda Aceh	5	3	2	1	6
14	イタリア	I.I.S. A. D'Aosta L'Aquila	5	3	2	1	6
		Convitto D. Cotugno L'Aquila					
15	キリバス	King George V & Ellaine Bernacchi School	5	1	4	1	6
16	マレーシア	SM SAINS HULU TERENGGANU	5	2	3	1	6
17	モルディブ	Centre for Higher Secondary Education	5	2	3	1	6
18	マーシャル諸島	Kwajalein Atoll High School	5	2	3	1	6
19	メキシコ	Cobao 03 Pinotepa Nacional	5	3	2	1	6
20	ミクロネシア	Chuuk High School	5	1	4	1	6
21	モンゴル	The Lab High School of young Inventors	5	3	2	1	6
		school No.1 in Ulaanbaatar					
		school No.11 in Ulaanbaatar					
		school No.31 in Ulaanbaatar					
		school No.45 in Ulaanbaatar					
22	ナウル	Nauru Secondary School	5	3	2	1	6
23	オランダ	Pontes Pieter Zeeman	5	3	2	1	6

番号	参加国	学校名	生徒		引率	合計	
			男	女			
24	ニュージーランド	ST MATTHEW'S COLLEGIATE SCHOOL	5	0	5	1	6
25	ニウエ	Niue High School	5	1	4	1	6
26	パラオ	BELAU MODEKNGEI SCHOOL	5	3	2	1	6
27	パプアニューギニア	Sogeri National High School	5	3	2	1	6
28	パラグアイ	Nihon Gakko	5	1	4	1	6
29	ペルー	IEPN° 20236 JOSE OLAYA BALANDRA	5	2	3	1	6
30	大韓民国	Incheon Haesong High School	5	0	5	1	6
31	ロシア連邦	School 51	5	2	3	1	6
32	サモア	LEIFIIFI COLLEGE	5	3	2	1	6
33	シンガポール	Temasek Junior College	5	1	4	1	6
34	ソロモン諸島	Visale Community High School	5	2	3	1	6
35	南アフリカ	Crawford College Pretoria	5	2	3	1	6
36	スリランカ	Agamathi Balika Maha Vidyalaya	5	2	3	1	6
		Girls' High School					
		Kalutara Balika National School					
		Wadduwa Central College					
		Royal College Panadura					
37	タイ	Satee Phuket School	5	1	4	1	6
38	トンガ	TONGA HIGH SCHOOL	5	2	3	1	6
		TONGA COLLEGE ATELE					
		QUEEN SALOTE COLLEGE					
39	トルコ	Çankırı Türkiye Odalar ve Borsalar Birliği Fen	5	3	2	1	6
40	ツバル	Fetuvalu Secondary School	5	2	3	1	6
41	米国（ハワイ）	HENRY J. KAISER HIGH SCHOOL	5	0	5	1	6
42	バヌアツ	Malapoa college	5	2	3	1	6
43	ベトナム	Ha Long high school	5	3	2	1	6
		Hon Gai High School					
			214	93	121	43	257

主催者挨拶



鈴木 直道

北海道知事

皆さん、こんにちは。ようこそ北海道へ。イランカラフテ。日本を含めた世界44か国から“「世界津波の日」高校生サミット”へ参加いただいた高校生の皆さん、そしてご来賓の皆さまへ心より歓迎を申し上げます。

最初に私が申し上げました「イランカラフテ」という言葉は、我が国の先住民族であるアイヌの人たちの挨拶で、「あなたの心にそっと触れさせていただきます。」というメッセージが込められた、北海道を訪れる方々へのおもてなしの合言葉です。皆さんにはサミットのテーマでもあるこの言葉をぜひ覚えていただきたいと思います。イランカラフテ。

さて、この北海道で行われます高校生サミットは、2015年12月に国連において「世界津波の日」が制定されたこと機に創設され、昨年の和歌山県に続き、今回が4回目の開催となります。

北海道では過去にも1993年の北海道南西沖地震とその直後の津波で200名を超える方々の尊い命が犠牲になったほか、2000年の有珠山噴火など、大規模な災害を経験いたしました。そして震度7を観測し甚大な被害をもたらした北海道胆振東部地震から1年を経過したなか、防災の意識を高めるサミットの開催は、大変意義深いものがあります。

私たちはこうした災害の記憶を教訓として、防災・減災の取り組みの重要性や災害時の迅速な避難が生死を分けること、災害後の迅速でより良い復興には、住民や関係者をはじめたくさんの方々の理解と協力が必要なことを学んできました。皆さんには北海道が経験してきた命の大切さや、今後への備えといった教訓について共に学んでいただきたいと思います。

そして先ほど紹介した「イランカラフテ」という言葉に込められた「あなたの心にそっと触れさせていただきます」という思いを大切にお互いの心に触れあうことで「きずな」を深め、世界中に同年代のネットワークを築いていただくことを心から期待しております。このサミットで「きずな」を深めた皆さまが、将来、それぞれの国において活躍するリーダーとなり、各国・各地域の理解と連携を一層深めていくことを心から願っております。

すでにご覧になられたかと思いますが、会場の入口には、北海道の雪で作った雪だるまが皆さんを歓迎しております。また、おいしい食べ物もたくさん用意しておりますので、滞在中にたくさんの北海道の魅力に触れていただき、北海道を大好きになっていただきたいと思います。

結びになりますが、世界津波の日の提唱者である二階衆議院議員をはじめ、このサミットに大きな力を尽くしてくださいました国連防災機関や参加いただいた各国の皆さま、関係省庁、団体の皆さまに心から深くお礼を申し上げます。私からの挨拶とさせていただきます。

「世界津波の日」提唱者挨拶



福井 照

提唱者代理 衆議院議員

11月5日を世界津波の日にしようと提唱したのが、二階俊博自由民主党幹事長でございます。そして2015年の国連総会で193か国、全会一致で採択されました。また、この「世界津波の日」を記念する行事を執り行うにあたり、若者が交流できる場を提供したい、ならば世界の高校生に集まっていただくのはどうだろう、と提案したのも二階俊博幹事長でした。二階幹事長は、本日、皆さまにご挨拶差し上げる予定でしたが、都合により出席することができませんでしたので、私が、挨拶を代読させていただきます。

『「世界津波の日」2019高校生サミット in 北海道』の開催に当たり、一言、ご挨拶を申し上げます。

「世界津波の日」高校生サミットは2016年に第1回サミットが開催されて以来、今年で4回目を迎えます。今回は海外から43か国、214名に参加をしていただきました。日本の高校生と合わせて過去最多の394名となります。第1回から数えますとこれまで58か国から海外の高校生が延べ853名、国内の高校生が延べ535名、参加することとなります。今回参加する高校生と合わせて1,000名を超えることとなりました。関係者の皆さまのご協力に感謝いたします。

2016年に高知県の黒潮町にて初めて開催をいたしました。2回目は沖縄県の宜野湾市、昨年は「世界津波の日」ゆかりの地で、私（二階幹事長）の地元でもある和歌山県の和歌山市で開催をいたしました。これまでの高校生サミットでは、日本と海外の高校生が一緒になり災害について学び、災害に備える意識を高めるとともに交流を深めて参りました。

今回開催される北海道では、1993年に北海道南西沖地震が発生し奥尻島に大きな津波が押し寄せ200人を超える尊い命が失われました。また昨年9月6日には北海道胆振東部地震が発生し、厚真町などで多くの方が犠牲となりました。このような災害から一人でも多くの命を守るためには、過去の災害の教訓から学ぶこと、そして普段からの心構えが重要であることなど、高校生の皆さんが北海道の地で多くのことを学んでいかれることを願っております。

近年は気候変動の影響もあり世界各地で災害が頻発しております。私はこうした自然災害から一人でも多くの命を守るために、国土強靱化を進めて参りました。同時に国連防災機関（UNDRR）を中心とする「仙台防災枠組」による国際的な防災の取り組みにも力を入れてきております。「世界津波の日」の活動は、SDGsにも通じる取り組みでもございます。SDGsの「誰一人取り残さない」という理念を実現するためにも強くしなやかな国土を構築することが使命だと思っております。

最後になりますが、地震が起きたら逃げてください。また避難することをご家族やご友人に伝えてください。そうして津波から自分、大切な人、家族と友人の命を救ってください。私自身、子や孫たちの未来のため、災害に強くしてしなやかな強靱な国土を作りあげ、後世に平和のバトンを繋いでいきたいと考えております。災害で一人の命も失わせないと考えのもと、世界の人々と心を合わせて取り組んでいく所存でございます。

自由民主党幹事長・国土強靱化推進本部本部長、衆議院議員 二階 俊博。

皆さまへのご挨拶を代読させていただきました。ありがとうございました。

事前学習ツアー報告



参加校代表

北海道奥尻高等学校

北海道江差高等学校

道内からサミットに参加する高校生が奥尻島で行った「事前学習ツアー」について報告します。

奥尻島は北海道の南西部に位置する島で、1993年に発生した「北海道南西沖地震」で大きな被害を受けました。

先月、北海道内の17校から53名の高校生が事前学習ツアーのために奥尻島に集まりました。ほとんどの参加者がお互いに初対面でしたが、フェリーの上で自分の名前が入ったカードを交換し、英語でお互いに自己紹介をしたことで、皆すぐに打ち解けることができました。

奥尻島では、美しい景色と地元の海の幸を堪能しました。そして皆で高校生サミットでの目標を再確認し、サミットの成功に向けて全力を尽くすことを誓い合いました。

2日目はフィールドワークを行いました。この日のフィールドワークでは、1993年の地震と津波を経験した地元のガイドさんたちから、当時の津波の被害について多くのことを学びました。

ガイドの方が津波の惨状を最近の出来事のように語っていたことがとても印象的でした。実際に被害を体験した人にとっては、決して忘れることができない出来事なのだと実感しました。

その後、「奥尻島津波館」を訪れ、さらに当時の被害について学びました。

奥尻島の自然の雄大さを感じるとともに、この自然が時に危険なものであることをあらためて知りました。

このフィールドワークでは震災の慰霊碑である「時空翔」、避難場所としての人工地盤「望海橋」そして「ドーム型避難路」も視察しました。

慰霊碑では犠牲者のために献花を行い、この悲劇を忘れてはいけないと心に誓いました。

フィールドワークを通じ、津波の恐ろしさを知り、高校生として私たちができることをあらためて考えました。

今では奥尻は幸せに溢れた美しい町ですが、この平和な風景は、当然のように保証されているわけではないことを忘れてはいけません。

過去の出来事を教訓として、将来の自然災害に備えることの大切さを、私たち高校生から世界中の皆さんに訴えていきたいと思えます。

フィールドワークに続き、ワークショップを受講しました。

初めに、気象庁の方から、地震と津波の発生するメカニズム及び災害の際に気象庁が果たす役割について学びました。緊急の際は、テレビやインターネットを通じ、気象庁が発する正確な情報を受け取ることが大事だと認識しました。

また、航空自衛隊の職員の方から、災害が起こった際の救助活動について学びました。私たちも自然災害で困っている人の支援活動に参加したいと思いました。

ワークショップの最後には英語でのディスカッションが行われ、「津波による深刻な被害を食い止めるために、海岸線に巨大な防波堤を建設することは最善の方法か」というテーマに沿って話し合いました。真剣なディスカッションを通じてお互いに意見を交わし、自分たちの見解を確かめ合うことができました。英語でのディスカッションは難しかったですが、苦勞して自分の考えを英語で伝えることができたとき、達成感を感じ、大変うれしく思いました。

夜にはレセプションパーティが開かれました。奥尻の新鮮な海の幸をいただきながら、新たな友人たちと楽しい時を過ごしました。それぞれの学校の紹介を聞いて、自分たちの通う高校との違いを実感しました。

奥尻島での事前学習ツアーを通じて、自分たちが生まれる前に北海道南西沖で発生した地震の実態を知ることができました。そして以前にも増して、自然災害について考えるようになりました。

この2日間のサミットでは、皆さんとともに災害に対する考えを深め、お互いに意見を交わしていきたいと思えます。報告を終わります。

■ 発表スライド





1 班代表

タイ

Satree Phuket School

皆さん、おはようございます。1 班を代表してタイから来た私たちが北海道を周ったツアーで得られた経験について報告させていただきます。

ツアーの初日に私たちは奥尻島を訪れました。最初に向かったのは人工地盤「望海橋」です。この建造物は、1993年7月12日に発生した北海道南西沖地震の後に造られたもので、もし津波が発生した場合には、避難スペースとして機能します。この「望海橋」は高さが6.2メートル、全長は163.5メートルにも及び、災害時、2,000人以上の人が避難しても大丈夫とのことでした。

次に「奥尻島津波館」へ向かいました。ここは1993年に奥尻島を襲った津波の悲劇を記録した展示施設です。海を見渡すことができる美しい建物で、館内には災害の記録が展示され、その記憶と教訓を来訪者に伝えています。

津波直後の様子や被災した人々の状況を見るのはとてもつらいことでした。一方で、国を挙げての復興へ取り組みに感銘を受けました。ここで学んだ最も大事なことは、人々に災害の知識を広めその意識を高める必要があるということです。そして、自然災害の破壊的な影響を少しでも減らすためのこうした活動は、世界中のどこでもできることであると信じています。

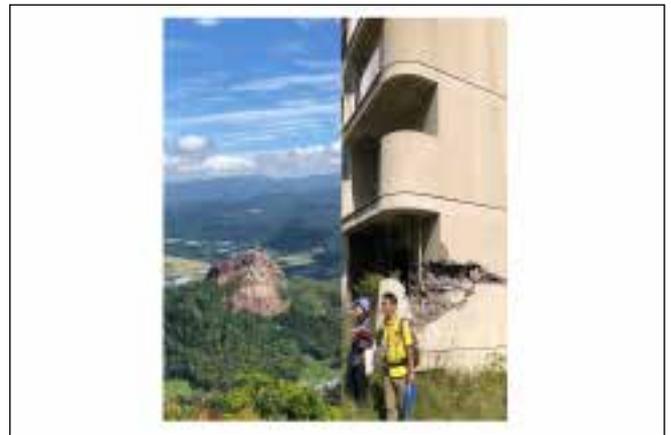
翌日、倶知安農業高等学校に到着すると、生徒の皆さんの温かい歓迎を受けました。学校の中で靴を脱いでスリッパに履き替えたのは、生まれて初めての体験でした。皆さんと挨拶を交わした後、生徒たちによるプレゼンテーションが始まりました。この学校の生徒数は約80名で、通常の授業に加え、農業について専門的に学んでいます。オリエンテーションを受けたあと、私たちは3つの班に分けられました。

私たちのタイとバヌアツの班は、ポテトケーキを作ることになりました。このポテトケーキは地元の名物の一つで、学校の近所にある農家さんの畑で、生徒たちが協力して育てたジャガイモを使用しています。私たちは、プレーン、抹茶、そしてチョコレートの3種類のフレーバーのケーキを作りました。そのほか地域の特産品として、トマトジュース、味噌、青唐辛子のペースト、そしてソーセージが紹介されました。

最終日は、有珠山の噴火について学ぶために、洞爺湖町にある火山科学館を訪問しました。館内で、1977年の大噴火を含め有珠山の火山活動の記録を紹介したビデオを鑑賞しました。噴火当時、その地域の200世帯以上が被害を受けたのです。

その後、ガイドさんの案内で被害を受けた建物を見学しました。建物の天井が噴火で飛ばされてきた岩に押しつぶされていたり、火山活動に起因する地殻変動により橋が遠く離れたところまで押し流されている様子を観察することができました。こうした経験をもとに、日本人たちは災害へ備えるための教訓を導きだし、若い人たちに受け継ぐためにこの教育施設を作ったのです。

■ 発表スライド



スタディツアー報告 2班



2班代表

ロシア連邦
School 51

皆さんこんにちは。ロシアから来た私たちが、2班を代表してスタディツアーの報告をします。

私たちのツアーの最初の訪問先は、霧多布高校で、生徒の皆さんが暖かく私たちを迎えてくれました。彼らは、津波の記憶を伝える劇を披露してくれました。感動的であるとともにとても考えさせられる内容でした。私たちのグループの韓国人の生徒からは、「韓服」について説明があり、K-POP に合わせたダンスを披露してくれました。その後、教室で様々な授業を見学してから、日本の団扇作りを学びました。最後に日本の生徒と一緒に昼食を食べました。皆さんに学校のおもてなしに感謝いたします。

昼食後には、浜中町総合文化センターを訪れました。ここでは、津波の被害を受けた方の話を聞くことができました。またシェイクアウト訓練を体験し、机の下に潜り込みました。この後、霧多布湿原センターを訪問しました。

翌日は、釧路市民防災センターを訪れ、地震体験室では、地震の揺れを体験しました。また消防隊の装備品を身に付けたり、消防車を見学したり、模型によるシミュレーションにより津波の説明を受けました。お別れの際には、消防士の皆さんに見学と講義のお礼をしました。

その後、私たちは、釧路湖陵高校にお邪魔して生徒の皆さんと、ロシアと日本の教育の違いやマンガやアニメなどについて会話しながら昼食を取りました。

食事の後、阿寒湖に向かい北海道の自然を堪能しました。硫黄の温泉は、腐った卵のような匂いがしました。私たちは湖に降りてみることにしました。湖面に近づいたところで、太陽の光が差ってきて、湖と山々の荘厳で美しい景色が私たちを歓迎してくれているようでした。また湖畔にある阿寒湖アイヌシアターでは、アイヌの人たちによる舞踊を鑑賞しました。

最終日は、美瑛町の青い池まで足を運びました。澄んだ水が真っ青に輝く、素晴らしい景色でした。周りを散策することができたので、写真を撮たくさん撮ってきました。次に国立大雪青少年交流の家で、防災についてのビデオを鑑賞しました。ここでは、白樺の木で本のしおり作りも体験することができました。全員がうまく作れたわけではありませんが、みんな楽しんで参加していました。その後、観光名所となっている丘を訪れ、地平線まで広がる色とりどりの花畑を鑑賞しました。一通り景色を楽しんだあと、私たちはアルパカと触れ合える施設へ向かいました。かわいくて人懐っこいアルパカたちと楽しい時を過ごしました。ここが私たちのツアーの締めくくりとなりました。

最後にもう一度、ツアーの関係者の皆さんに感謝の言葉を述べたいと思います。ありがとうございました。

■ 発表スライド



主催者挨拶



佐藤 嘉大

北海道教育委員会教育長

皆さん、こんにちは。イランカラブテ。

「世界津波の日」2019 高校生サミット in 北海道の主催者を代表し、世界各国及び日本各地からお集まりの皆さんに、ご挨拶を申し上げます。「世界津波の日」2019 高校生サミットが、ここ「北の大地」北海道において、海外から43か国、国内68校から394名の高校生をお招きして、このように盛大に開催できたことを心から嬉しく思っております。

「世界津波の日」高校生サミットは、次代を担う世界の高校生が一堂に会し、防災・減災、復興などについて理解を深めることを目的に、自然災害から命を守り、「より良い復興」に向け、何をすべきか、何ができるかを話し合い、共有することを通して、世界各国の相互理解とネットワークの輪を広める、大変意義のある取り組みです。

昨日の分科会では、過去の教訓を伝承し、災害への備えと迅速な避難について意識を高めるとともに、社会貢献や被災当事者と支援者の視点を持って、復興に向け共に行動するという観点から、熱心な話し合いが行われました。本日はその成果を、この後の分科会報告及び大会宣言発表において、今後、自分たちが取り組むこととしてとりまとめ、世界に発信されます。

参加された皆さんが、本サミットにおいて知り合った世界各国の高校生と、今後、「きずな」を一層深め、地震や津波などの災害から国民の生命、身体、財産の保護、国民生活及び国民経済に及ぼす影響を最小化できる、国土強靱化を担う将来のリーダーになること、また、本サミットの成果が、国や地域を問わず世界の高校生に引き継がれることで、世界中で津波の脅威についての関心が一層高まり、自然災害から命を守る対策が更に進むきっかけになることを、心から期待しております。

結びになりますが、本サミットの開催にご協力を賜りました、関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、ご出席の皆様のご活躍とご健勝をご祈念申し上げ、挨拶といたします。



カーシー・マディ 国連防災機関官房長

若き津波防災大使の皆さん。本日この場所で、皆さんとお会いできて大変嬉しく思います。

工藤彰三国土交通大臣政務官、武部新衆議院議員、船橋利実衆議院議員、鈴木直道北海道知事、佐藤嘉大北海道教育委員会教育長、そしてお集まりのご来賓の皆さま及び関係者の皆さま、「世界津波の日」高校生サミット2019の総会に皆様と共に参加できることを、大変嬉しく思います。

熱意とやる気にあふれ、決意に満ちた多くの若者たちと出会えることは大変嬉しいことです。皆さんの熱意と努力に感謝いたします。皆さんは、4回目となるこの高校生サミットに参加することにより、今、自分の周りに座っている人たちのみならず、自分の家族・学校・コミュニティ、さらには、世界中の人々に向けて、災害に強い安全な世界への変革を望み、その実現に向けて積極的に行動していくというメッセージを送っているのです。

この一年、「フライデーズ・フォー・ザ・フューチャー」という画期的な運動が開始されるのを目の当たりにしてきました。これについては詳しい説明は不要でしょう。もうすでにこの運動に加わっている人も皆さんの中にもいるかもしれません。世界レベルでこの運動を広めようと行動を始めたのは、スウェーデンのグレッタ・トゥーンベリさんというたった一人の人間でした。皆さんはマーガレット・ミードという文化人類学者をご存知でしょうか。彼女が遺した言葉「思慮深く献身的な人々による少数の集まりが世界を変えられるということを疑わないでください。実際に、そうした集団だけが世界を変えてきたのです」が正しいことを、グレッタさんが証明してくれました。

私は国連防災機関（略称UNDRR）を代表して皆さんにお伝えしたいと思います。私たちUNDRR、そして国連は、皆さんと同じように、緊急の変革が必要であると考えており、その変革とは差し迫った、そして不可欠なものであると認識しています。

きっと皆さんは、学校の勉強を通して地質年代という言葉に耳にしたことがあるかと思います。人類は、地質そのもの、そして生態系をも変えるほどの影響を地球に及ぼしており、私たちは、この新しい地質年代の始まりを生きているのです。皆さんもご存知のとおり、私たちが及ぼす影響は、ときに壊滅的な結果を引き起こしてきました。我々は、人類の生存を脅かす危険なレベルに、この地球を温暖化させてしまいました。地球上の多くの動植物を絶滅に追いやり、生物の豊かな多様性を変化させるまでになっています。住むところを失った人々が大量に発生し、紛争は長期化し、資源獲得のための競争も激化するなど、人類が地球環境へもたらしている影響は数知れません。既存のリスク、そして新たなリスクが、かつてない規模で地球に影響を及ぼしています。この20年間で、異常気象の頻度は2倍にも達しています。またこれまでにないほどの頻度で、ハリケーン、サイクロン、干ばつ、洪水が発生しています。

私たちが今いる日本も例外ではありません。ここ日本における津波の影響について考えてみましょう。今日、巨大な津波の発生が稀なことは、

幸運にほかなりません。しかし、ひとたび津波が発生すると生命、財産、経済に甚大な損害を与えることとなります。

今年の11月5日には、4回目の「世界津波の日」を迎えます。「世界津波の日」は2015年の国連総会にて、142か国が共同提案を行い、決議が採択されました。「世界津波の日」の制定において重要な役割を果たしたのが日本でした。津波のリスクに対する人々の意識を高め、津波への備えを強化し津波から命を守ることを目的として制定されました。この「世界津波の日」は、世界中の人たちが、既存の災害リスクを減らしつつ、今後新たな災害リスクを生み出さないことの重要性を認識する良い機会です。

11月5日を「世界津波の日」としたのは、有名な「稲むらの火」の逸話にちなんでいます。これは濱口梧陵という人についての話です。彼は村人たちを救うために自身の稲むらに火をつけました。稲むらに火を放つことにより、海岸に近いところにいる村人に、高台に避難するよう促したのです。彼は、このようにして、1854年11月5日に起こった安政南海地震が引き起こした大津波の情報を有効かつ迅速に村人に伝え、結果として、村人を安全に避難させ、また、その後の村の「より良い復興」にも尽力したそうです。

この「稲むらの火」の逸話をとおして、濱口梧陵の防災に対する考え方は、現代を生きる私たちへの教訓として今日に語り継がれ、危険が迫る人々に対して取るべき行動を迅速に伝える早期警報システムの重要性、伝統的に蓄積されその地域に受け継がれている知識の価値、そして「より良い復興」の必要性を現代の私たちに伝えていきます。

これらの教訓は、「仙台防災枠組」の中でも指導原則として反映されています。「仙台防災枠組」は、津波の被害を受けた仙台で2015年に開かれた、「第3回国連防災世界会議」において採択された世界規模の防災指針であり、災害リスク削減とレジリエンス構築の実現に向けた計画として全ての国連加盟国に承認されました。

私が所属する国連防災機関の役割は、国連に加盟する国々、コミュニティ、そしてあらゆるステークホルダーを支援して、「仙台防災枠組」を実施し、その理念の実現を目指すことです。皆さんにお願いしたいことは、ここ数日間に学んだ、津波災害を古くから何度も経験するなかで日本に受け継がれている防災に関わる優れた実践の事例や教訓を、皆さんの心に刻み、世界に発信していただくことです。

このサミットは、津波やその他の災害のリスクに対処するために自分が住むコミュニティ、自分の国、そしてより良い世界のために何ができるか、災害に対してどのように社会の強靱化を進めるかについて議論する場であるとともに、世界中から集まった皆さんが互いの経験を共有しながらともに学ぶ良い機会になったことと思います。

心強いことに、皆さんには、この地球を守るため共に学び、経験を共有し、励ましあう仲間がいます。2016年の高知県、2017年沖縄県、そして昨年之和歌山県でこれまでに3回開催された「世界津波の日」高校生サミット参加者と今回の参加者を合わせて1300人以上の高校生が世界から参加してくれました。皆さんは、この1300人を超える「若き津波防災大使」の一員に加わります。

これをとても大事なこととして申し上げています。というのも、この数日間培った人とのつながり、これを大切に育て、友情をはぐくみ、経験を共有し、約1000人の過去3回のサミットの参加者とともに、変革に向けた真のムーブメントを皆さんに作り出して欲しいと心から願っているからです。

このスピーチの始めに、私は、地球をとりまく状況について厳しいお話をさせていただきました。私が希望を失っているように思われるかもしれませんが、そうではありません。今日、皆さんを見て、私の中に明るい未来への希望が生まれました。皆さんのエネルギー、変革に向けた熱意に敬意を表します。どうか、地球の未来、将来の世代のため、皆さんが暮らす社会のため、労を惜まず、何事にも恐れることなく立ち向かってください。そして、この地球に暮らす全ての人が平和と繁栄を享受し、誰もが取り残されることがない世界を実現してください。

ありがとうございました。

内閣総理大臣挨拶（ビデオメッセージ）



安倍 晋三
内閣総理大臣

高校生の皆さん、イランカラフテ、こんにちは。そして、ようこそ日本へ。

内閣総理大臣の安倍晋三です。

ここ北海道に、40か国以上の国々から約400名の次世代を担う若者が集い、『『世界津波の日』2019高校生サミット in 北海道』が盛大に開催されますこと、大変うれしく思います。

今から8年前、我が国では、東日本大震災という大災害が発生。約2万人もの尊い命が犠牲となりました。私たちは、応急対策や復旧・復興に全力を挙げの中で、普段からの準備や防災教育の大切さなど、多くのことを学びました。

こうした経験を世界中で役立ててもらふことは、震災への対応に多くのご支援をいただいた我が国の使命です。高校生サミットの開催意義もそこにあると考えています。

皆さんは、9月7日からの北海道滞在中、奥尻や釧路などを訪問し、北海道の歴史や文化、自然に触れる機会をもったと思います。ここ北海道は、豊かな自然に恵まれる一方で、1993年の北海道南西沖地震とそれに伴う大津波、2000年の有珠山噴火、昨年（2018年）の北海道胆振東部地震など、災害による甚大な被害を幾度となく経験してきました。北海道には、「キラコタン」と呼ばれるアイヌ語の地名があります。これは、「逃げる村」という意味で、かつて大津波が来襲した際、村民みんなと一緒に避難をし、命が守られたことにちなみ、この名前が付けられたと聞いています。このように古くから命を守るための取組みが根付いてきている北海道、また、幾度となく災害にみまわれてきた北海道は、皆さんが防災等について学び、議論する格好の場所であると思います。

この北海道もそうですが、昨今、日本各地で大きな自然災害が相次いで発生しています。政府として、災害から人々の命や暮らしを守るため、防災・減災、国土強靱化の取組に全力を挙げているところです。皆さんには、今回のサミットを通じて、地震・津波の脅威、防災・減災の在り方について学び、お互いの絆を深めていただきたいと思います。ここで得られた知識や絆を活かし、将来、それぞれの国における防災や国土強靱化のリーダーとして活躍して欲しいと思います。

皆さんにとって、今回のサミットが有意義なものとなることをお祈りし、私からのご挨拶とさせていただきます。

全体記念撮影 (9月11日総会・閉会式)



分科会グループ

■分科会分野①「知識を得る」

グループ	参加国・参加都道府県	参加校名	参加人数	備考
A	北海道	北海道釧路北陽高等学校	3	
	宮城県	宮城県仙台第三高等学校	2	
	東京都	東京都立白鷺高等学校	2	
	静岡県	学校法人静岡聖光学院 静岡聖光学院中学校・高等学校	3	
	徳島県	徳島県立城南高等学校	2	
	中国	The High School Attached to Dalian University of Technology	5	分科会司会
	オランダ	Pontes Pieter Zeeman	5	
	オーストラリア	Rose Bay High School	5	
	サモア	LEIFIIFI COLLEGE	5	
B	北海道	北海道霧多布高等学校	3	
	宮城県	宮城県仙台第一高等学校	3	
	東京都	東京学芸大学附属国際中等教育学校	3	
	静岡県	静岡県立池新田高等学校	2	
	和歌山県	和歌山県立耐久高等学校	3	
	福岡県	福岡県立戸畑高等学校	1	
	インド	Z.P.H.SCHOOL TALAGADADEEVI	4	
	フランス	Lycée PAUL SABATIER CARCASSONNE	5	
	フィジー	ADI MAOPA SECONDARY SCHOOL	5	分科会司会
	ナウル	Nauru Secondary School	5	
C	北海道	北海道札幌西高等学校	3	
	北海道	函館ラ・サール学園 函館ラ・サール高等学校	3	分科会司会
	福井県	福井県立鯖江高等学校	3	
	三重県	三重県立四日市高等学校	1	
	京都府	学校法人立命館 立命館高等学校	3	
	ベトナム	Ha Long High School / Hon Gai High School	5	
	ペルー	IEPN° 20236 JOSE OLAYA BALANDRA	5	
	ニュージーランド	ST MATTHEW'S COLLEGIATE SCHOOL	5	
	ソロモン諸島	Visale Community High School	5	
D	北海道	北海道浦河高等学校	3	分科会司会
	岩手県	岩手県立釜石高等学校	4	
	群馬県	高崎市立高崎経済大学附属高等学校	4	
	神奈川県	学校法人聖マリア学園 聖光学院高等学校	3	
	徳島県	学校法人村崎学園 徳島文理高等学校	1	
	トルコ	Çankırı Türkiye Odalar ve Borsalar Birliği Fen	5	
	パラグアイ	Nihon Gakko	5	
	キリバス	King George V & Ellaine Bernacchi School	5	

分科会グループ

■分科会分野②「意識を高める」

グループ	参加国・参加都道府県	参加校名	参加人数	備考
E	北海道	北海道根室高等学校	3	
	宮城県	宮城県佐沼高等学校	1	
	静岡県	学校法人星美学園 静岡サレジオ高等学校	3	
	岡山県	岡山県立井原高等学校	3	
	高知県	学校法人明德義塾 明德義塾高等学校	2	
	モンゴル	The Lab High School of young Inventors / school No.1 in Ulaanbaatar school No.11 in Ulaanbaatar / school No.31 in Ulaanbaatar school No.45 in Ulaanbaatar	5	
	マレーシア	SM SAINS HULU TERENGGANU	5	
	チリ	Colegio Bajo Molle	5	分科会司会
	ツバル	Fetuvalu Secondary School	5	
F	北海道	市立札幌開成中等教育学校	3	分科会司会
	東京都	東京都立南多摩中等教育学校	3	
	静岡県	静岡県立沼津西高等学校	1	
	和歌山県	和歌山県立日高高等学校	2	
	高知県	学校法人土佐塾学園 土佐塾高等学校	2	
	スリランカ	Agamathi Balika Maha Vidyalaya / Girls' High School Kalutara Balika National School Wadduwa Central College / Royal College, Panadura	5	
	ロシア連邦	School 51	5	
	メキシコ	Cobao 03 Pinotepa Nacional	5	
	南アフリカ	Crawford College Pretoria	5	
G	北海道	北海道札幌国際情報高等学校	3	
	埼玉県	学校法人早稲田大学 早稲田大学本庄高等学院	3	
	静岡県	静岡県立駿河総合高等学校	3	
	大阪府	大阪府立高石高等学校	3	
	和歌山県	和歌山県立串本古座高等学校	3	
	高知県	高知県立宿毛高等学校	2	
	モルディブ	Centre for Higher Secondary Education	5	
	カナダ	Port Hardy Secondary School / North Island Secondary School	5	分科会司会
	クック諸島	Tereora College / Nukutere College / Papaaroa Adventist School Titikaveka College	5	
H	北海道	北海道釧路明輝高等学校	3	
	北海道	北海道札幌視覚支援学校	1	
	山梨県	北杜市立甲陵高等学校	2	
	三重県	三重県立桑名高等学校	3	
	大阪府	学校法人創価学園 関西創価高等学校	3	
	奈良県	奈良県立畝傍高等学校	2	
	高知県	高知県立大方高等学校	3	
	インドネシア	SMA Negeri 13 Banda Aceh	5	分科会司会
	ドイツ	Gymnasium Wilhelm-Raabe-Schule Hannover	5	
ニウエ	Niue High School	5		
I	北海道	北海道江差高等学校	3	
	北海道	北海道函館水産高等学校	3	
	神奈川県	横須賀市立横須賀総合高等学校	3	分科会司会
	愛知県	学校法人愛知真和学園 大成高等学校	2	
	兵庫県	兵庫県立尼崎小田高等学校	2	
	愛媛県	愛媛県立宇和島東高等学校	2	
	大分県	大分県立佐伯鶴城高等学校	3	
	シンガポール	Temasek Junior College	5	
	ブラジル	Olavo Hansen State School	5	
トンガ	TONGA HIGH SCHOOL / TONGA COLLEGE ATELE / QUEEN SALOTE COLLEGE	5		

分科会グループ

■分科会分野③「復興に向け共に行動する」

グループ	参加国・参加都道府県	参加校名	参加人数	備考
J	北海道	北海道登別明日中等教育学校	3	
	北海道	学校法人札幌日本大学学園 札幌日本大学高等学校	3	
	栃木県	栃木県立佐野高等学校	2	分科会司会
	東京都	学校法人富士見丘学園 富士見丘中学高等学校	2	
	和歌山県	和歌山県立新宮高等学校	3	
	熊本県	熊本県立熊本高等学校	3	
	大韓民国	Incheon Haesong High School	5	
	米国（ハワイ）	HENRY J. KAISER HIGH SCHOOL	5	
	ミクロネシア	Chuuk High School	5	
	バヌアツ	Malapoa college	5	
K	北海道	北海道滝川高等学校	3	
	北海道	学校法人札幌慈恵学園 札幌新陽高等学校	3	
	宮城県	宮城県多賀城高等学校	3	
	千葉県	千葉市立稲毛高等学校	3	
	大阪府	大阪教育大学附属高等学校平野校舎	2	
	福岡県	学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学校・高等学校	4	分科会司会
	タイ	Satree Phuket School	5	
	アルゼンチン	Valle de Cholila Agrotechnical Educational Center	5	
	パラオ	BELAU MODEKNGEI SCHOOL	5	
L	北海道	北海道札幌南高等学校	3	
	北海道	北海道奥尻高等学校	3	
	宮城県	宮城県気仙沼高等学校	3	
	埼玉県	埼玉県立不動岡高等学校	2	
	高知県	高知県立高知南高等学校	2	
	イタリア	I.I.S. A. D'Aosta L'Aquila / Convitto D. Cotugno L'Aquila	5	
	エルサルバドル	Colegio Internacional de San Salvador	5	
	マーシャル諸島	Kwajalein Atoll High School	5	
	バブアニューギニア	Sogeri National High School	5	分科会司会

分科会ファシリテーター



小樽商科大学の中津川助教を統括者とし、高校教員・大学生で構成するファシリテーターを配置し、分科会における討論の活性化の促進や、大会宣言の取りまとめに向けての意見集約のお手伝いをいただきました。

ファシリテーター統括者	
小樽商科大学グローバル戦略センター 助教 中津川 雅宣	
ファシリテーター統括者補佐大学生	
小樽商科大学 伊藤 萌 ・ 邊見 歩花	

分科会分野	グループ	担当教員	担当大学生
①	A	北海道札幌東高等学校 渋谷 奈緒美	北海道教育大学 池田 拓誉
	B	北海道札幌西高等学校 伊藤 都章	小樽商科大学 山田 泰生
	C	北海道札幌北高等学校 加藤 涉	北海道教育大学 今井 拓巳
	D	北海道札幌南高等学校 大塚 徹	北海道教育大学 山田 光歩
②	E	北海道札幌東陵高等学校 小林 理恵子	小樽商科大学 澤邊 友斗
	F	北海道札幌英藍高等学校 中元 徳寿	小樽商科大学 桑重 奈央
	G	北海道札幌国際情報高等学校 木村 準一	北海道大学 清水 星良
	H	北海道当別高等学校 渡邊 翼	小樽商科大学 渡邊 すず香
	I	北海道札幌東豊高等学校 中川 順一	北海道大学 菅原 季起
③	J	北海道千歳高等学校 山崎 秀樹	小樽商科大学 片倉 玄太
	K	北海道北広島高等学校 坂 恵子	小樽商科大学 松永 春緋
	L	北海道有朋高等学校 古起 快	北海道大学 佐藤 衣吹